



文頭の非制限的関係詞whichの指示特性に関する機能的・語用論的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2022-04-13 キーワード (Ja): 関係詞, 指示, 非制限的関係詞節 キーワード (En): which, it, that, relative pronouns, reference, nonrestrictive relative clauses 作成者: 中山, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000646

文頭の非制限的關係詞 *which* の指示特性に関する機能的・語用論的考察A Functional and Pragmatic Approach to Referential Properties of the Sentence-Initial Nonrestrictive Relative Pronoun *which*中山 仁¹
Hitoshi NAKAYAMA¹

キーワード：which, it, that, 關係詞, 指示, 非制限的關係詞節

Keywords：which, it, that, relative pronouns, reference, nonrestrictive relative clauses

ABSTRACT

This paper is concerned with some referential properties of the sentence-initial nonrestrictive relative pronoun *which* that occurs in unembedded subordinate clauses (e.g. *Which means what? / Which reminds me.*) and in the idiomatic phrase *Speaking of which*. Unlike in the case of restrictive relative pronouns, the referential properties of nonrestrictive *which* have been generally regarded as the same as those of the anaphoric pronouns *it* and *that*, which makes one assume that all three can be used interchangeably. In fact, apart from some shared properties, there are several functional and pragmatic differences among them, and the relative pronoun *which* has some referential properties of its own. In order to demonstrate the distinctiveness of the sentence-initial *which* expressions, I will show the differences in frequency between the *which*-expressions and those with *it/that* substituted for *which* in certain circumstances. Then, some functional-pragmatic properties of *which* are examined in terms of “prior knowledge” and “wide/narrow reference” (referring to the referent widely / specifying it narrowly) introduced by Kamio (1990) and Kamio and Thomas (1999), in which referential differences between *it* and *that* are discussed in depth. In conclusion, I argue that *which* need not refer to the referent widely, which means that *which* is similar to *that* in terms of prior knowledge. I also argue that typically *which* refers to its preceding information vaguely, which is taken as a cue to combine it with part of the speaker’s knowledge and contextual information available on the spot, and derives an improvised utterance such as an interrogative, a recollection, etc.

抄録／要旨

本稿では、主節に埋め込まれずに独立して生じる非制限的關係詞節の *which* 節 (*Which means what? / Which reminds me.* など：以下、*Which* 節) および *Speaking of which* の2種類の表現における非制限的關係詞 *which* と代名詞 *it/that* を機能的・語用論的観点から比較することによって、文頭に生じる *which* の指示特性を明らかにする。*Which* 節と *Speaking of which* の *which* は、その代名詞的な性質ゆえに *it/that* と共通した指示特性を持つ一方で、それ自体で特異な分布と指示特性を持つ。これについて、神尾 (1990)、Kamio and Thomas (1999) による代名詞の機能上・語用論上の指示特性に沿って検討を加える。その結果、*which* は話し手にとって必ずしも既獲得情報を指す必要はなく、指示集中的である必要もないこと、特に、指示対象が話し手にとって既獲得情報ではなく、*which* が指示集中的ではない部分が *it/that* との違いを際立たせる *which* の特異な一面であると主張する。また、その特異性が現れやすい環境としては、その場で示された未処理の情報を受け、その情報とは別のことにも注意を向けながら会話を進める場合が相応しいことを示す。

1. はじめに

本稿では、非制限的關係詞節のうち、以下のような主節に埋め込まれずに独立して生じる which 節（以下、Which 節と呼ぶ）および成句的表現である Speaking of which に共通する關係詞 which の指示特性について論じる。¹

- (1) a. A: Well—the good news for the environmentalists is the bike runs on unleaded.
B: Mhm.
A: *Which is good news.* Cos like that's—not so expensive. (Biber et al. 1999: 223)
- b. A: I think he has a partial tear on one of his lungs, maybe other internal organs.
B: *Which... which means what?* (COCA, 2010, TV)²
- (2) a. 'We can take one or two clouds on our Christmas cheer... *Speaking of which*, where's Bill? I want to wish him season's greetings.' (BNC Online)
- b. Daddies can be so much fun. *Speaking of which*. How is your father these days? (COCA, 1999, TV)

(1) と (2) の文脈からも分かるように、この種の表現は典型的に話し言葉などのくだけた表現で用いられる (Biber et al. 1999, 中山 2020)。一般に、非制限的關係詞 which の先行詞は先行する文の一部、文、またはパラグラフ全体など様々である。その点で關係詞 which は代名詞 it/that と同様の指示機能を持っているように見える。実際、Jackendoff (1977) は非制限的關係詞節とその先行詞の間の関係を、代名詞としての關係詞とその先行詞の間の関係として捉えなおし、關係詞と先行詞の間の照応関係が成り立つ限りにおいて非制限的關係詞節が起ころうと説明している。(3b, c) の非制限的關係詞節で「文」が先行詞になれるのは、關係詞 which が it/that と同様の振る舞いをするからである (長原 1990 参照)。

- (3) a. Bill came late, and that bothered Susan.
b. Bill came late, *which* bothered Susan.
c. Poor Fred. I wonder if the Army's generous with their peanut butter. *Which* reminds me, I'm starving. (Capote, 23-24)

非制限節の關係詞 which を代名詞と見なすことができる点については疑問の余地はないであろう。しかし、そ

のことと「which が it/that と常に交換可能であるか」という問題とは別である。例えば、(3c) の *Which reminds me* は *It/That reminds me* と言い換えてよいだろうか。また、*Speaking of which* を *Speaking of it/that* と言い換えてよいだろうか。これらは、コーパスで検索すると容易に分かるように、いくつかのパターンで which を用いた表現のほうがより典型的である。そうすると、which には何らかの点で it/that にはない特徴や、it/that よりも顕著な特徴があるのではないかと推測される。

そこで、本稿では which と代名詞 it/that との共通点と相違点を機能的、語用論的観点から検討することによって which の指示特性を抽出する。これについては中山 (2021) においても検討されたが、そこでの対象は Which 節に限られていたので、本稿では Speaking of which も考慮に入れて which に共通する指示特性について検討する。中でも語用論的観点からの which の指示特性についてはより詳細な検討を加える。なぜなら、which の指示特性には発話解釈の観点からの説明が重要な部分を占めると予測されるからである。例えば (1), (2), (3c) から分かるように、Which 節と Speaking of which は話し言葉を使用域とするのが典型的である。ということは、発話時における話し手の想定 (assumptions) が何らかの形で which の指示特性に関与していると思われる。また、これらの表現と先行文が異なる話し手によって発話される (つまり話し手が交替する) 場合も多くあるので、発話の場における話し手と聞き手の発話意図についても考慮に入れる必要があるだろう。³

以下では、まず、Which 節のいくつかの特徴的な表現パターンと Speaking of which の分布と、which を it/that で入れ替えた同タイプの表現の分布が異なっていることを確認し、Which 節と Speaking of which がそれ自体独特の表現であることを示す。その上で、which の指示特性の検討に入る。機能上・語用論上の特徴については、特に神尾 (1990)、Kamio and Thomas (1999) に基づく it/that の指示特性の比較を参考に which の指示特性の共通点と相違点を割り出す。加えて、語用論的考察では which の発話解釈プロセスの観点からの検討も行い、which の指示特性について詳しく論じたい。

2. Which 節と Speaking of which における it/that による言い換えの可能性

2. 1 Which 節の which を it/that で入れ替えた場合

まず、Which 節のいくつかの特徴的な表現パターンを取り上げ、それらと which の部分を it/that で入れ替えたものとどのような分布を示すか確認する。(4) は COCA を用いて主節から独立した Which 節を対象に、

その中で使用頻度の高い述語動詞のパターンを抽出したものである（網羅的な検索ではないが、Which 節全体において占める割合の大きい「ピリオド（.）による切れ目に続く which 節」を対象とした）。(4) に示す動詞による Which 節は全体の約70%を占めている（動詞は頻度の高い順に配列している）。(4) のうち、reminds は他の動詞と比べて頻度上やや低い位置にあるが、実際の例を観察すると Which 節の典型的なパターンと認めてよいと判断できる。さらに、(4) の動詞に後続する語句の代表的なパターンを示したのが (5) である。⁴

(4) Which is/means/was/brings/makes... /reminds... .

(5) a. Which is why... / Which is a good thing. / Which is to say... etc.

- b. Which means (that)... etc.
- c. Which brings us/me to the question. etc.
- d. Which makes me wonder... etc.
- e. Which reminds me./.

(5) の表現の中から (5a) Which is why, (5b) Which means, (5c) Which bring us/me to, (5d) Which makes me wonder, (5e) Which reminds me./. の文字列を対象に、それらを it/that と入れ替えた表現が存在するか、また、存在した場合はそれぞれの表現の頻度数にどのような違いがあるかについて COCA を用いて比較した（ここでもピリオドによる切れ目に続く Which 節を対象にしている）。その結果、それぞれ順に表1のようになった。

HELP	ALL FORMS (SAMPLE): 100 200 500	FREQ
1	. THAT IS WHY	4404
2	. WHICH IS WHY	2656
3	. IT IS WHY	178
	TOTAL	7238

HELP	ALL FORMS (SAMPLE): 100 200 500	FREQ
1	. THAT MEANS	10461
2	. IT MEANS	5023
3	. WHICH MEANS	2860
	TOTAL	18344

HELP	ALL FORMS (SAMPLE): 100 200 500	FREQ
1	. WHICH BRINGS US TO	283
2	. WHICH BRINGS ME TO	201
3	. THAT BRINGS US TO	79
4	. THAT BRINGS ME TO	25
5	. IT BRINGS US TO	6
6	. IT BRINGS ME TO	6
	TOTAL	600

HELP	ALL FORMS (SAMPLE): 100 200 500	FREQ
1	. IT MAKES ME WONDER	132
2	. WHICH MAKES ME WONDER	39
3	. THAT MAKES ME WONDER	7
	TOTAL	178

HELP	ALL FORMS (SAMPLE): 100 200 500	FREQ
1	. WHICH REMINDS ME .	131
2	. THAT REMINDS ME .	72
3	. WHICH REMINDS ME .	54
4	. THAT REMINDS ME .	51
5	. IT REMINDS ME .	7
6	. IT REMINDS ME .	1
	TOTAL	316

表1. Which 節と which を it/that で入れ替えた表現の頻度数（該当する文字列が検出されなかった場合（FREQ = 0）の結果は表示されない）

表1に関してまず断っておかなくてはならないのは、文頭に生じる代名詞としての which の COCA 内での総数 (8,134件) は文頭の it/that の総数 (233,081件) と比べると圧倒的に少ないということである。⁵その上で上記の頻度差を見ると、(5c) Which bring us/me to, (5e) Which reminds me./ の優位性は極めて特異であるということが分かる。

次に、Which 節を it/that と入れ替えた場合、it と that のどちらが多く用いられるかを見てみると、(5d) Which makes me wonder を除くすべての表現において it よりも that の方が多いのが分かる。(5d) が他と異なるのは単なる例外であるのか、it の指示特性によるものであるのか不明だが、少なくとも it も which と類似のパターンで出現することがあるという事実は確認できた。

以上の比較は網羅的な調査ではないものの、一定の傾向を示している。第一に、Which 節に特徴的な表現には、which を it/that で入れ替えた表現もある程度存在する。これによって、おそらく it/that による言い換えが実際にある程度可能であると推測される。第二に、Which 節の which を that で入れ替えた表現は、Which 節の which を it で入れ替えた表現よりも多い。このことは、which の代名詞としての指示特性が it よりも that に何らかの点で類似していることを示唆している。

2. 2 Speaking of which の which を it/that で入れ替えた場合

次に、Speaking of which の which を it/that で入れ替えた場合の分布状況を確認する。Which 節と異なり、Speaking of which はそれ自体で独立した句と言えるので、Which 節の場合と違ってこの句に後続する語句のパターンは考慮に入れずに単一の文字列として比較できる。ただし、検索に際しては、Speaking of which が通例直後にコンマ (comma) 等の切れ目を伴うこと、また、that が限定詞として (例えば that money のように) 生じる例を除外することの2点を考慮して、Speaking of which./ と Speaking of it/that./ の文字・記号列で頻度数の比較をした。ここでもピリオドによる切れ目に続く Speaking of which と Speaking of it/that を対象に COCA を用いて検索している。表2がその結果である。

表2から明らかのように、Speaking of which の頻度数は that と比べてはるかに高い。また、Speaking of which に相当する表現としては Speaking of that のみ該当し、

Speaking of it は検出されなかった。このことから、「Speaking of +代名詞」としては Speaking of which が典型的であること、which 以外の代名詞としては that が用いられやすいということが分かる。

以上の結果と、2. 1節の Which 節で見た結果を考え合わせると、これらの which を用いた表現については、which と共起する動詞とともに構成される表現パターンに特異性が見られるということだけでなく、代名詞の選択としては it/that ではなく which が選択される傾向が高いことが分かる。もちろん、which の代わりに it/that が用いられる可能性があることは表1、2で見た通りである。特に、that は it よりも which に近い関係にあることが示唆された。したがって、代名詞としての which は it/that のそれぞれと一部の機能は共有する一方で特異性も持つというのが、which についてのより正確な捉え方と言えるだろう。

以上を踏まえて、次節では which の指示特性について具体的に検討していくことにする。はじめに、機能上・語用論上の特徴について、神尾 (1990)、Kamio and Thomas (1999) に基づく it/that の指示特性の比較について概観し、それに基づいて which の指示特性の抽出を試みる。

3. it と that の指示特性の違い

神尾 (1990)、Kamio and Thomas (1999) によれば、一見同等と思われる代名詞の it と that は機能的・語用論的に異なる指示特性を持つ。ここでのキーワードは、Kamio and Thomas (1999) の用語を用いれば、prior knowledge と wide/narrow reference である。これらを神尾 (1990) に沿って言い換えれば、prior knowledge は「会話に先立って話し手が既に獲得している情報」、wide/narrow reference は「指示が広範な情報のまとまりを指す (指示拡散的である) こと / 指示が限定的である (指示集中的である) こと」となる。以下、prior knowledge を「既獲得情報」と呼び、wide/narrow reference については「指示拡散的」と「指示集中的」の対照的な用語を用いて it と that の指示特性の違いを概観する。⁶

神尾 (1990)、Kamio and Thomas (1999) (以下、両者を合わせて「神尾ら」とする) が扱うのは前方照応の代名詞としての it と that で、先行詞は主に文あるいは節 (clausal antecedent) を対象とする (一部名詞相当語句

HELP		ALL FORMS (SAMPLE): 100 200 500	FREQ
1	<input type="checkbox"/>	. SPEAKING OF WHICH,	568
2	<input type="checkbox"/>	. SPEAKING OF THAT,	53
		TOTAL	621

表2. Speaking of which./ の which を it/that で入れ替えた表現の頻度数 (Speaking of it は検出されなかった)

(nominal antecedent) も含む)。なお、ここで扱う that は強勢を伴わないものとする。先ほどの用語を用いて神尾らが指摘した it/that の指示特性の違いをまとめると、第一の要因である既獲得情報に関する特性は (6) のようになる。

- (6) a. it の指すものは、話し手にとって既獲得情報 (= 発話される以前から、it を用いる話し手が既に持っていた情報) でなければならない。
b. that の指すものは、話し手にとって既獲得情報である必要はない。

(6a, b) に示された it と that の指示特性の違いを具体例で示したのが (7) と (8) である。

- (7) [A rushes into the room excitedly]
A : Guess what! I just won the lottery!
B 1 : *It's amazing!
B 2 : That's amazing!
- (8) A : Fred arrived even later than Sally.
B 1 : I know that.
B 2 : I didn't know that.
B 3 : I know it.
B 4 : *I didn't know it. (Kamio and Thomas 1999: 292)

(7) で、話し手Aが宝くじに当たったことを相手のBに打ち明けた場合、それに対するBの自然な応答としてはB2のようにThatを用いるのが自然であり、B1のようにItを用いるのは“quite artificial”となる。これは、“I just won the lottery”という話し手Aの情報が、話し手Bにとって新情報 (completely novel information) と考えられるからである。

(8) は、Fredの到着時間について、Bがknowを用いて応じたものである。knowという動詞はその情報を既に知っていることを認めていることを含意するので、I know that. (B1) と言えばFredがSallyより遅れて来たことは既獲得情報、I didn't know that. (B2) と言えばそれが新情報であることを示す。B1とB2の2通りが可能なのは、thatの指示特性(6b)によるものである。(6b)の「thatの指すものが話し手にとって既獲得情報である必要はない」ということは、「既獲得情報であってもよい」ということを意味する。一方、B3とB4のitで容認度の対照が見られるのは、(6a)にあるように、itの指す情報が既獲得情報でなければならないからである。

ある情報が既獲得情報であると認められるのは語の意味内容からだけではない。文脈から既獲得情報であると

認められる場合、または、少し前に(一定の処理時間を経て)既獲得情報になったと認められる場合は、itが可能となる。例えば(9)で、先行する内容をitで指示することができるのは、for a long momentによって一定の処理時間を経たことが含意されているからである(下線部は筆者による; itのイタリックは原文のまま)。

- (9) [Alice and Carl are long-term housemates, whose relationship has been troubled recently. Alice comes home one evening to confront Carl with some news.]
“Carl, I have something important to tell you. Mark called me into his office this morning and said he wanted to give me Gino's job. He made me a great offer and I accepted it. But of course I'll have to move to San Francisco.”
Carl stared at her in silence for a long moment. Then, forcing himself to speak calmly, he said softly, “I hope it will make you very happy, my dear.” (Ibid.: 293)

神尾らが指摘した、it/thatの指示特性の違いをもたらし第二の要因、すなわち「指示拡散的・指示集中的」性質については(10)のように説明される。

- (10) a. itはその場で指していることにまつわる事柄を含めた、より一般的な事象を念頭に置いている。[指示拡散的]
b. thatはその場で指していることだけに注意が向けられている。[指示集中的]
- (11) Sonja was born out of wedlock, but I never revealed
a. it to her.
b. that (Ibid.: 296)

(10)に沿って(11)を解釈すれば、文中のitとthatの指示する内容の幅の違いを見出すことができる。まず、文中のrevealは「秘密などを明かす」という意味の動詞なので、it/thatの指示する問題の情報(Sonjaが非嫡出子であることについての情報)が既獲得情報であることを示している。両者の違いは、itが「Sonjaが非嫡出子であることにまつわる情報も含めて指す」のに対し、thatは「単に出生時の両親の関係についてのみ言及する」という点にある。言い換えれば、itはその場で指していることにまつわる事柄を含めた、より一般的な事象を念頭に置いているのに対し、thatはその場で指していることだけに注意が向けられていることになる。このような理由で、神尾らはitの指示を指示拡散的と呼び、thatの指示を指示集中的と呼ぶ。

両者の違いは英語母語話者の判断によっても裏づけら

れている。Kamio and Thomas (1999) の英語母語話者を対象とした調査では、it は that よりも一般的なものを指す印象があり、that は指示対象がより限定的 (localized) で、何を指すかはっきりとしているという判断結果が得られている。

神尾らは、既獲得情報と情報の幅に基づく it/that の違いを情報処理の過程とも関連づけて次のように説明している。it は話し手にとっての既獲得情報を指すが、言い換えれば、その情報は話し手の知識の一部に組み込まれる処理が完了したものである。したがって、それは話し手の他の知識・記憶とともに整理・統合され、情報の相互作用が可能な状態にあることを意味する。このことは (11) で it が「Sonja が非嫡出子であることにまつわる情報も含めて指す」ことと整合する。一方、that は既獲得情報でないものも指すことから、比較的情報処理の浅い段階にあるものを指すと考えられる。したがって、それは他の情報との相互作用が十分可能な状態になっていない。これが、指示対象が比較的狭いことの背景にある。

神尾らの指摘において注目すべき点は、it/that の指示対象の特定にあたって、代名詞と先行詞の間の照応関係、すなわち、文中あるいは文間から明示される要素間の対応関係を主たる頼みとするのではなく、文脈、知識・記憶を含めた情報の相互作用、さらに、(紙面の都合上本稿では触れないが) 発話意図なども視野に入れた語用論的要因とも整合する分析を行ったことである。これは他の代名詞の指示について考える際にも有効な重要な分析であると言える。

以上、(6) の既獲得情報と (10) の指示の幅 (指示拡散のか指示集中的か)、および、情報処理の段階の違いの点から it と that の指示特性の違いを見てきた。これに基づいて、次節では Which 節と Speaking of which における which の指示特性の抽出を試みる。

4. Which の指示特性

一般に、通常の (独立していない) 非制限節の関係詞の場合、which は it/that のどちらとも言い換えが可能、つまり、“which = it = that” と考えられている。しかし、これまでの議論と用例を通して、Which 節と Speaking of which における which は一律に it/that と言い換えられるほどは同値の関係にないことを見てきた。このような実態をより適切に説明するためには、which が it/that とある点では類似していながらも、別の性質も持ち合わせていることを明らかにする必要がある。したがって、まずは前節で it/that の指示特性を特定するのに用いた2つの観点、すなわち「既獲得情報」と「指示の幅」の点から順に which を比較し、which の特異性を見出すことにする。

4. 1 既獲得情報の指示

まず、既獲得情報の観点から文頭に生じる which の指示特性について検討する。(1) の例に戻って (1a) と (1b) の2つの which を比較すると、既獲得情報の点で違いがあることが分かる。

- (1) a. A : Well—the good news for the environmentalists is the bike runs on unleaded.
B : Mhm.
A : **Which** is good news. Cos like that’s—not so expensive. (Biber et al. 1999: 223)
- b. A : I think he has a partial tear on one of his lungs, maybe other internal organs.
B : **Which... which** means what? (COCA, 2010, TV)

(1a) の Which 節とその先行文は同一の話者によるものである。先行文で提供した情報を自ら Which is good news. で受けている状況なので、which の指す情報は話し手にとって既獲得情報であると言える。

一方、(1b) は相手の発話を受けて Which 節が用いられている例である。しかも、Which... which means what? という発話の仕方から、この話し手は相手の発話を一旦 Which で受けたものの、その発話の意味がすぐに理解できず、その場で質問の形に切り替えて相手に返している状況が理解できる。これは、相手の発話内容を十分消化しないうちにとりあえず受けるために最初の Which が発話されたものと捉えることができる。したがって、which の指す情報は既獲得情報になっているとは言えない。また、この情報は神尾らの言及する情報処理の段階において初期の段階にあると考えられる。なお、Which means... のパターンの場合、that 節が後続する Which means that... については、表1で見たように It/That による同表現の方がより多く用いられるが、文字列を Which means what? に限定して検索すると、Which の場合は確認できたが (53件)、It/That による同パターンの表現は検出されなかった。これについては次節でさらに詳しく検討する。

「既獲得情報を指さない」という点では Speaking of which の場合も同様である。(2) を例に Speaking of which における which の指すものについて見てみよう。

- (2) a. ‘We can take one or two clouds on our Christmas cheer... *Speaking of which*, where’s Bill? I want to wish him season’s greetings.’ (BNC Online)
- b. Daddies can be so much fun. *Speaking of which*. How is your father these days? (COCA, 1999, TV)

Speaking of which が「そういえば」と解釈されることから分かるように、which は先行文の命題内容というよりはその発話自体を指すのに用いられている。例えば (2a) では「クリスマスの気分のひとつ二つ暗い話があっても仕方ない」と言った直後に Speaking of which が生じているが、それに続くのは全く別の話題 (Bill はどこにいるのかという質問) である。この場合、先行する発話は別のことを思い出すきっかけになっているだけで、先行発話の中身と関連づけて話を発展させているわけではない。言い換えれば、このような Speaking of which は話題の方向を変える「ところで」と似ている。which の指すものが先行発話 (という事実) であるとなると、それは発話の場でまさに生み出されたばかりのもので、情報処理の点から見て十分に処理されていない、あるいは表面的にしか処理されていないと言える。したがって、which の指すものは既獲得情報とは言えない。

(1a) と (1b) の相違、および (2) の文脈を観察した結果から、既獲得情報についての which の指示特性は以下ようになる。

(12) (Speaking of which を含めた) 文頭の which の指すものは、話し手にとって既獲得情報である必要はない。

(12) は (6b) に示した that の指示特性と同様である。このことは、2 節で文頭の which に特徴的な表現を対象に、それを it/that で入れ替えた同種の表現の頻度を比較した際、it よりも that のほうが入れ替えの可能性が高いと示唆されたことと無関係ではないと思われる。

4. 2 指示拡散的か指示集中的か

指示の幅の点から which の指示特性を考えてみる。まず、4. 1 節で見たように、which は情報の獲得の点で that と同様の指示特性を持つ。言い換えれば、which/that は発話されたばかりのものを「あたかも指で指すかのよう明確に指す」(神尾 1990) というもので、その場で指していることだけに注意が向けられている。その意味で which も that と同様に指示集中的であると言える。また、which はそもそも関係詞であり、基本的に先行詞は言語文脈から特定できると了解されているので、指示対象が明確であるという意識が働くことも指示集中的であることに貢献していると考えられる。

ところが、Which 節や Speaking of which ではしばしば which の指すものがはっきりしない場合もある。はっきりしない場合は、「直前の発話を指しているようだが、実際に何を指すか明確でないように思える」場合である。このような漠然とした場合については、(13) の通

り OED2 でも指摘されているが、引用している例が古く、また、文頭の which に関連する情報について検討するには文脈が不十分なので、より広範に文脈が確認できる (14) を例に考えてみる。

(13) Hence, in vulgar use, without any antecedent, as a mere connective or introductory particle.

1723 Swift *Mary the Cook—Maid's Let.* 13 Which, and I am sure I have been his servant four years since October, And he never call'd me worse than sweetheart, drunk or sober.

1905 *Daily Chron.* 21 Oct. 4/7 If anything 'appens to you—*which* God be between you and 'arm—I'll look after the kids.

(*The Oxford English Dictionary*, 2nd edition: s.v. which, pron. and adj. 14. b)

(14) “Here you go,” Claire said, setting a coffee cup on the table in front of Evanelle. // Evanelle peered into the cup. “You didn’t put anything in it, did you?” // “You know I didn’t.” // “Because your side of the Waverleys always wants to put something in everything. Bay leaves in bread, cinnamon in coffee. I like things plain and simple. *Which* reminds me, I brought you something.” Evanelle grabbed her tote bag and brought out a yellow Bic lighter. (COCA: 2008, FIC)

(14) の物語の登場人物である Evanelle という女性は人に物をあげるのを趣味のようにしていて、人があとになって役に立つ物を、その人が必要だと気づく前にあげることのできる不思議な能力の持ち主である。ここでは Evanelle がそのような物を Claire にあげる場面で Which reminds me を用いている。ここの Which は直前の I like things plain and simple. を指しているのでもないし、それを含む先行文脈の特定の内容を指しているのでもない。この場面は、Evanelle がまたいつものように人に何かをあげようと話を切り出すのに Which reminds me が用いられているのである。したがって、この Which は何を指すというのでもなく、単に話の途中で「そういえば、思い出した」と差しはさむ表現の一部となっているだけで、もはや Which によって何かを指すという意図はない (あるいは希薄化) している。このように、Which は「先行要素について何かを述べる」というよりは、自分が話したい次の話題に誘導したいという意図で用いられていると考えられる。

同様のことは (15) の Speaking of which でも確認できる。(15) は山内 (2019: 38) にある例であるが、そもそも山内 (2019) がこの例を挙げたのは「Speaking of

which は常に先行詞を必要とする」という予測を裏付けるためである。これらの例では、いずれも which の先行詞が明示されていないために、話し手や聞き手がその不自然さに反応して別の語句で具体的に言い換えたり (= (15a)), 先行詞を求めて問い返したり (= (15b)), Speaking of which の使用を打ち消したり (= (15c)) している。

- (15) a. [...] LEO: Apple has filed yet another patent the thing goes right in there with a fork... special fork..., a patent for a curved touch display. [...] LEO: *Speaking of which...* speaking of patent controls... I congratulate and thank Adam Corolla, he has apparently settled now with the podcasting patent control. [...] (MacBreak Weekly, 19 Aug. 2014)
- b. [...] She's got the Momma voice down pat." "*Speaking of which*, have you talked to Joy lately?" [...] "How is that a 'speaking of which' ?" [...] "We're talking about kids. Joy and Scot are trying to get pregnant. It's a speaking of which."
(R. Seltz, Coming Unglued)
- c. [...] and you just stretch one word out all the way to the end of like the melody it's really stupid. *Speaking of which...* actually not "speaking of which." 'Cause this literally came from nothing. [...] (<https://youtu.be/nqZGmumGZrU>)

これらの例は、which が明確な先行詞の存在を前提とすることを示す証拠として用いることができる一方で、別の視点から観察することによって、話し手の発話時点での情報処理の状況が見えてくる例としても用いることができる。本稿の議論では後者の点に注目したい。

(15) に対する別の視点とは、これらが、which が漠然としたものを指していることを示す例として見ることができるということである。この見方で重要なのは、(15) で Speaking of which を用いるのが正しいかどうかは別として、それが実際に、しかも無意識に発話されているということである。その上で、これらが発話された理由を吟味してみる。(15a)において、Speaking of which の which の先行詞は patent (特許) である。話し手はここでいったん patent を指した直後に、より具体的な patent control (特許管理) という先行文脈にない概念に絞り込んで、同じ話題を進展させているのが分かる。つまり、話し手はより漠然とした幅のある概念 (patent) を which で指し、それからより限定的な概念 (patent control) へと指示対象の絞り込みをするという処理を行っていると考えられる。(15b) の Speaking of which で

は、聞き手が指示対象を把握できなかったために問い返しをしているのであって、話し手は Speaking of which の発話を不自然とは思っていない。では、なぜ聞き手が指示対象を把握できなかったのかと言えば、それは話し手が先行発話の発話中に関連して頭に浮かんだ複数の概念をもとに Speaking of which を発話しているからである。ここではその概念のうちの1つである "kids" をきっかけとして、新たな発話 (Have you talked to Joy lately? という質問) をしている。当然、聞き手はそのプロセスを知る由もないので問い返しをすることになるのである。(15c) では Speaking of which という発話が打ち消されているのは確かだが、それを発話したのは事実である。話し手は Speaking of which と言った直後、ふと考えなおし、前言に which の指すべき先行詞がないと気づいて Speaking of which の発話を打ち消したのである。おそらく話し手は単に次の話題に話をつなぎたかっただけで、Speaking of which は一種のつなぎ言葉として自然に発せられたものと思われる。もはや which の指示機能が薄れてしまった状態であったと考えられるが、which の存在をふと意識したために考え直し、打ち消すことになったものと思われる。^{7, 8, 9}

(14), (15) における which は、それぞれの例で程度に差はあるものの、いずれも漠然とした指示をしていることが分かる。漠然としていることを「指示が限定的でない」あるいは「指示の幅が比較的広い」と捉えれば、which は「指示拡散的」と言えるかもしれない。実際、中山 (2021) では which の指示の幅が比較的広いという点に注目して指示拡散的としている。しかし、神尾らによれば、it が指示拡散的であるというのは「その場で指していることにまつわる事柄を含めた、より一般的な事象を念頭に置いている」ことを意味するので、(14), (15) のような which の漠然とした指示については、むしろ、that との比較に基づいて整理するのがより妥当と思われる。そこで、本稿では上記の中山 (2021) の指摘を修正するために、which の指示の幅については「指示集中心かどうか」という観点から以下のように捉える。

that は、指示の幅に関しては「指示集中心」である。(14), (15) で which の指示が漠然としている状況は、先行詞を「それ」と指さすように指し示すことができない状況である。そう考えると、which は that と異なり「指示集中心でない」と言うことができる。もちろん、本節冒頭で which は that と同様、指示集中心的な性質を本来的に持つと指摘しているので、これとあわせて、指示の幅に基づく which の指示特性を述べる必要がある。その結果、指示の幅に関する which の特性は以下ようになる。

(16) (Speaking of which を含めた) 文頭の which はその

場で指していることだけに注意が向けられている必要はない。

[指示集中的であるとは限らない]

(16) を認めるためには神尾らの分析に一部修正を加える必要があるだろう。神尾らに沿って考えれば、「指示集中的でない=指示拡散的である」となるからである。「指示拡散的」というのは既獲得情報を中心に情報の相互作用を伴う定着した情報のまとまりを指示対象にしていることを言う。それは指示の「幅が広い」のであって、「漠然」としてはいるのではない。そうすると、指示拡散的な性質の中に漠然とした指示を含めることはできない。そこで、「指示集中的でない」場合の対象を「漠然とした指示」にまで拡大して含めるといふ、神尾らの定義に解釈の変更を加えることにする。したがって、(16)の「指示集中的であるとは限らない」とは、「指示集中的⇔指示拡散的」という二項対立に基づいて考えるのではなく、「指示集中的でないが、指示拡散的でもない」というものも容認する立場での記述ということになる。

既獲得情報と指示の幅の点から it/that の指示特性に沿って which の指示特性を検討してきた。その結果、必ずしも which は既獲得情報である必要はなく、指示集中的である必要もないと結論づけられた。これによって、which が it/that と共通する面を持つと同時に特異な面もあわせ持つということを示すこともできた。(12)の既獲得情報に関する指示特性からは which と that の類似性が示された。一方、(16)の指示の幅に関する指示特性からは which の特異性が示された。

(12) と (16) に沿って考えると、Which 節と Speaking of which が典型的である場合というのは which の特異性をはっきりと現れる場合ではないかという予測が成り立つ。言い換えれば、Which 節や Speaking of which は「その場で示された未処理の（完全には処理されていない）情報（発話）を受け、その情報とは別のことにも注意を向けながら会話を進める」場合に典型的に使用されるのではないかという予測である。次節では、この予測が正しいことを示す根拠のひとつとして、発話の場においてそのような文脈の相互作用が発生する例を取り上げる。

5. 発話の場に依存した which

Which 節と Speaking of which の典型的な例は以下のようなものである。

(17) a. A : I think he has a partial tear on one of his lungs, maybe other internal organs.

B : Which... which means what?

b. 'We can take one or two clouds on our Christmas cheer... Speaking of which, where's Bill? I want to wish him season's greetings.' (= (2a))

(17a) の Which means... のパターンは、表1の頻度比較によれば That で入れ替えた表現の方が多いが、Which means what? を COCA で検索すると、Which (19) /That (7) /It (0) という頻度数の差となり、Which 節が主流となる。同様のことは Which is what? / Which is? / Which means? についても当てはまる（これらについては、it/that で入れ替えた表現は検出されなかった）。つまり、先行発話を Which で受けて、Which を含む文が質問の形になって発話されるパターンは Which 節に極めて特徴的と言えそうである。この発話パターンは (17b) も同様で、Speaking of which の後に質問が発せられている。

両者の共通点を発話解釈の点から考えてみよう。(17a)では、「彼」の容態に関するAの発話をBがWhichで受けたものの、Bにはその発話の意味がすぐに理解できず、Aに質問の形で返している。Aの発話内容を十分消化しないうちにとりあえず受けて一瞬考えるために冒頭でWhichが発話されたものと捉えることができる。(17b)では、話し手が話の途中で突然Billのことを思い出したために、「そういえば」という感じでSpeaking of whichが挿入されている。どちらの例の場合も、whichに先行する発話に対してその場で発話を解釈しながら自分の知識・記憶を含む他の情報とのやりとりを行い、その結果、その場で湧いた質問を発しているのが分かる。これは前節で述べた「その場で示された未処理の（完全には処理されていない）情報（発話）を受け、その情報とは別のことにも注意を向けながら会話を進める」場合に相当する。

言い換えれば、Which 節と Speaking of which は、「限られた時間内で発話を理解し、それを受けて次の発話を産出しなければならない状況にある」という発話の場の制約の中で用いられる場合に典型的に使用されているということになる。

6. おわりに

Which 節と Speaking of which の which は、その代名詞的な性質ゆえに it/that と共通した指示特性を持つ一方で、それ自体で独特の指示特性を持つことが分かった。本稿では、中山 (2021) において対象とされた Which 節だけでなく、Speaking of which についても同様の指示特性が存在することを確認し、そこにさらなる語用論的検討を加えることによって、which の指示特性がより一

一般的な特性として認められることを示すことができた。神尾らによる代名詞の機能上・語用論上の指示特性に沿って言えば、which は必ずしも既獲得情報を指す必要はなく、指示集中的である必要もない。中でも、指示対象が話し手にとって既獲得情報でなく、which が指示集中的でないことが it/that との違いを際立たせる which の特異な一面であると言える。その特異性が現れやすい環境としては、その場で示された未処理の情報を受け、その情報とは別のことにも注意を向けながら会話を進める場合が相応しい。

本稿では which の指示的側面を中心に議論を行ったが、それは代名詞の概念的な情報に注目したものである。これとは別に、which には接続詞さらには談話標識としての機能を持つことから、which の手続き的情報 (= その前後の発話の関係について一定の推論処理の方向づけを示すための情報; cf. Blakemore (1992), Wilson and Sperber (1993)) についても検討の余地がある。これについては稿を改めて論じたい。

参 考 文 献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education.
- Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell.
- Butterfield, Jeremy (ed.) 2015. *Fowler's Dictionary of Modern English Usage*, 4th edition, Oxford University Press.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray. 1977. *X-bar Syntax: A Study of Phase Structure*. MIT Press.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわばり理論—言語の機能的分析』大修館書店.
- Kamio, Akio and Margaret Thomas. 1999. "Some Referential Properties of English *It* and *That*," in Kamio, A. and K. Takami (eds.), *Function and Structure: In Honor of Susumu Kuno*, 289-315. John Benjamins.
- 早瀬尚子. 2017. 「従属節からの語用論的標識化：発話動詞関連の懸垂分詞構文がたどる新たな構文への道」西原哲雄等(編)『現代言語理論の最前線』231-248. 開拓社.
- Huddleston, Rodney D. and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- 長原幸雄. 1990. 『関係節』新英文法選書第8巻. 大修館書店.
- 中山仁. 2006. 「独立文となった非制限的関係詞節の語用論—発話解釈の観点から—」『英語語法文法研究』第13号, 127-141.
- 中山仁. 2020. 「話し言葉に特徴的な非制限的 Which 節の生起要因」日本英語表現学会第49回大会. オンライン開催.
- 中山仁. 2021. 「話し言葉に特徴的な非制限的 Which 節の機能的・語用論的分析」『英語表現研究』38, 107-123.
- 大竹芳夫. 2009. 『の(だ)に対応する英語の構文』くろしお出版.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 澤田茂保. 2016. 『シリーズ英文法を解き明かす ことばの実際1 話しことばの構造』研究社.
- Sperber, Dan & Deirdre Wilson. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- 滝沢直宏. 2001. 「文外に先行詞を持つ関係代名詞 Which—語彙と構文の相互依存性と談話的機能—」『意味と形のインターフェイス (中右実教授還暦記念論文集)』下巻, 837-846. くろしお出版.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber. 1993. "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.
- 山内昇. 2019. 「Speaking of which の構文化分析再考」『英語語法文法学会第27回大会予稿集』32-39.

* 本稿は中山 (2020, 2021) の議論に新たな証拠と考察を加えたものである。また、本研究は科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 課題番号19K00687) による研究成果の一部である。

- 1 用例の字体については、説明の都合上原文の一部変更を加えている (例えば which/it/that をイタリックで表示するなど)。
- 2 COCA (Corpus of Contemporary American English) は Brigham Young University の Mark Davis 氏が公開している1990年以降のアメリカ英語の大規模コーパス。2019年時点で10億161万語。
- 3 which と代名詞との比較ということであれば、it/that のほかに this との比較も必要かもしれない。その場合は that と this をダイクシスの観点から考察する必要があるであろう。しかし、本論文では後述の Kamio and Thomas (1999) と同様の立場をとることにする。すなわち、ここでは that の指示特性のうち、ダイクシスとは関わらない部分を考察の対象とする。これによって、it と that の対照がより明確になる。
- 4 Which 節には be 動詞をはじめ平易な動詞を用いたものや、定型化した表現が多いことが分かる。簡潔な表現や定型表現は会話でも使用されやすいという点からも Which 節が話し言葉に適した特徴を持つと言える。
- 5 ここで示した文頭の which と it/that の総数は、COCA を用いて先行する文字列をピリオド (.) に限って検索した結果を示している。また、which については、後続する第1要素にすべての動詞を指定 (品詞で VERB.all を選択) している

ので、疑問詞 Which もある程度含まれている。その分を除外すれば、問題としている文頭の which の総数はさらに少なくなるが、すでに現段階で、対象とする総数の差は歴然であるので、これ以上の調査は行っていない。

- 6 「既獲得情報」は大竹（2009）が Kamio and Thomas（1999）の分析を紹介する際に *prior knowledge* にあてた用語である。本論でもこの用語を用いて説明することにする。
- 7 （15）の発話解釈についてはインフォーマントである Paul Martin 先生（本学医学部人間科学講座）によるコメントを含む。
- 8 これと似た会話のやりとりは日本語でも見られる。日本語で「そういえば」と言った話し手に対して、「『そういえば』って何よ？」と聞くような場合である。
- 9 *Speaking of which* の意味の希薄化と談話標識への構文化現象については早瀬（2017）を参照のこと。